赤いバラに覆われた、白い衣をまとう女性
——テスの二つのイメージ——

99E056　三 富 香 子

はじめに

トマス・ハーディ(Thomas Hardy, 1840-1928)は19世紀イギリスを代表する作家の１人である。ハーディの作品の多くは、運命に翻弄される人間の悲しさと苦悩を描き、ペシミスティックな色彩を持つ（中村３-５）。『テス』(*Tess of the D'Urbervilles,* 1891)もそうした作品の一つでハーディの最も有名な作品の中に数えられる。

ハーディが小説を書いた期間はイギリスにおける女性の社会的地位に変化が訪れた時期と一致している。この時代、女性は自らの地位向上に向けてフェミニズム運動を展開していた。この時期のフェミニズム運動の背景には、「アイドゥル・ウーマン」（有閑女性）としての「パーフェクト・レディ」像が社会規範となって女性を拘束していたことに加え（河村57-58)、女性の数の増加に伴う未婚女性の経済的困窮など、中産階級の女性の問題がある。19世紀半ば以降のイギリスでは適齢期の女の数に見合うだけの男の数が不足し、夫を見つけられない「余った女」が多数現れた。彼女たちは経済的自立を図らなければならなかったが、当時レディがその身分を失うことなく就ける職業はガヴァネス（家庭教師）しかなかった。しかし、大量の「余った女」に対してガヴァネスの口は足りず、女性の経済的困窮は、教育の機会および職業の選択における男女不平等という現実を揺さぶるエネルギーを生み出した。「余った女」の経済的問題に口火を切ったイギリスのフェミニズム運動は、やがて高等教育の拡大、選挙権の獲得、そして道徳におけるダブル・スタンダードの見直しへと展開していく(川本31-32)。

こうした社会背景の下、イギリス小説には「センセーション・ノベル」や「ニュー・ウーマン・ノベル」といった「女」が問題となる小説群が登場する。ハーディもまた、「女」を問題とした小説を書いており（土屋9-10)、『テス』にはヴィクトリア朝における性の道徳規範や、結婚制度に対するハーディの批判が込められている。『テス』はあからさまに性を取り上げているとして、性をタブーとするヴィクトリア朝社会から強い非難を浴びた。例えば、エンジェル・クレア(Angel Clare)が水溜りのところで娘たちを抱きかかえて運ぶ場面を手押し車で運ぶように変更したり、アレク・ダーバヴィル(Alec D'Urberville)とテス(Tess Durberyfield)の間に偽の結婚をさせたりするなど、不本意な訂正を強いられた（土屋160)。このようにして、ハーディはようやく『テス』を発表することができたのであったのだが、彼はヒロインのテスにそれまでのイギリス小説のヒロインが持たなかった肉体と性[1]を持たせることで、当時の「女」が抱えていた問題を暴いて見せたのである。

『テス』には様々な「赤」が描かれている。とりわけ、メイデイのダンスでテスだけが着けている赤いリボン、繰り返し描写されるテスの唇、アレクがテスを飾る赤いバラなど、テスを彩る赤は読者に鮮明な印象を残す。『テス』において、「赤」は強いメッセージを持つ。テスを彩る赤はテスの美しさ、そして肉体的、性的な魅力を表している。この「赤」という色を通

して作られていく彼女のイメージは魅力的ではあるが、このイメージによってテスはレイプの犠牲者となる。

こうした「赤」のイメージを持つ一方で、テスは「白」のイメージも持っている。それは、冒頭に現れる、メイデイのダンスにおける白いフロック姿のテスに象徴されるようなイメージである。テスの面影には幼さやあどけなさが残り、その性質は初々しく控えめで、献身的な愛情をそなえている。テスのこの純粋な性質は、テスに白いイメージを与えている。だが、この「白」のイメージもまたテスを悲劇へと導いていく。『テス』において、赤と白は二つの流れのように作品の根底に流れている。

『テス』における赤と白はある「女性」のイメージを読者に抱かせる色である。この二つの色に表されるイメージは、『テス』に描かれる「女」の問題を読み解く鍵となっている。本稿では、『テス』における赤と白が表すイメージ、そしてそのイメージを通して浮かび上がってくる問題点について考察する。

1．白としてのテス

作品の冒頭で、テスはメイデイのダンスの白いフロック姿で現れる。純白の衣装をまとったテスは純粋無垢な少女を彷彿とさせる。テスのこの姿はテスの「白」のイメージを象徴するかのようである。また、テスは「あどけない大きな瞳(large innocent eyes, 14)」の持ち主であり、彼女の顔には幼さが残る。

> Phase of her childhood lurk in her aspect still. As she walked along to-day, for all her bouncing handsome womanliness, you could sometimes see her twelfth year in her cheeks, or her ninth sparkling from her eyes ; and even her fifth would flit over the curves of her mouth now and then. (15-16)
>
> (訳)
>
> 彼女の姿には、まだ幼い頃の面影があった。今日も彼女が歩いていると、生き生きとした美しい女らしさにも関わらず、時として彼女の頬には12歳の彼女が垣間見られ、瞳からは9歳の彼女がひらめき、さらには口の曲線の上には5歳の彼女までもが見え隠れするのだった(2)。

この幼さがテスに純粋な少女という「白」のイメージを与えている。テスに垣間見られるこの幼さはヴィクトリア朝初期、中期に描かれている「絵画の理想の女性」と重なる。当時女性に求められていた純粋さや従順さは、子供っぽい丸顔、ピンクの頬、小さいバラのつぼみのような唇、愁いを含んだ大きな目によって表されている（坂井24)。当時の絵画に描かれている少女や女性像の中にも、大きな目が印象的な子供のような表情をしているものがある。*The English Illustrated Magazine*(Macmillan, 1884)の冒頭を飾る「少女像」や、N. Prescott Daviesが描く“A Winsome Maid”などはそのような少女たちであり、テスのイメージを彷彿とさせる（十九世紀英文学研究会)。

テスが「清純で汚れのない娘」であることは、居酒屋ロリヴァ亭(Rolliver's inn)の雰囲気にそぐわないことからも感じられる。酔った父親と母親をロリヴァ亭に迎えに行ったテスは、その場の酒気には母親の目にもひどく場違いに映る(28)。実際テス自身は、酔った父親を見ている

せいか酒場の雰囲気に対して潔癖な態度を示し、酒や俗っぽい空気とは距離を置いている。トラントリッジ(Trantridge)の人々が週末になると行うダンスにテスは長い間加わらなかった(64)。テスはトラントリッジの人々の酒気を好む性質や、週末のダンスに感じられる空気の中に自分とはそぐわないものを感じ取っているのである。トラントリッジの人々の中にあって、テスは明らかに異質な存在である。チェイズバラ(Chaseborough)でのダンスからの帰り道で、アレクのかつての愛人だったらしいカー・ダーチ(Car Darch)にとって、テスのしらふの笑い声は彼女を怒らせるに十分であった。カーは「不身持ちな女」と言われており、「清純な」テスに対して自分を「汚れた」「ふしだらな」女と感じ、自分とテスとの間にある種の優劣を感じ取っている(66-67)。このようにテスが性的に節操のない「不身持な女」とは対極にいる「清らかな娘」であることが表されている。こうしたテスの姿によって、テスが本来は「清純」で性的欲求の強い娘ではないことが示されているのである。

テスにおける「白」のイメージは時に神々しいまでの清らかさを伴って描かれる。テスが赤ん坊に洗礼を施す場面を見てみよう。アレクの私生児として生まれた彼女の赤ん坊は、わずかの間しか生きなかった。いまにも赤ん坊が死にそうになっているその晩、テスは洗礼を受けていないわが子が地獄へ行くことを恐れ、幼い弟妹たちと必死になって赤ん坊に洗礼を施す。ろうそくの光の下で、テスの白い寝巻き姿には女王とも言える威厳と清純な美しさがあった(94)。弟妹たちにとってテスはもはや姉ではなく、自分たちとは似通ったところのない神々しい存在だった。このテスの白い姿は聖母マリアのイメージに重ねられ、テスが本来持つ清らかで気高い性質が表現されている。

顔に幼い面影を残し、性的な匂いを排除され、聖母のイメージを重ねられるこうしたテスの姿は、ヴィクトリア朝で女性の理想とされた「家庭の天使(Angel in the Home)」にも重なる。「家庭の天使」とは、コヴェントリー・パトモア(Coventry Patmore, 1823-96)の詩『家庭の天使』(“The Angel in the House”, 1854-63)に由来する。結婚の幸福をうたい、妻の清らかな愛情を称えたセンチメタルなこの詩は広く一般に親しまれていた。この詩の中で天使のように清らかな妻に捧げられた「家庭の天使」という名称は、やがて理想の女性を表す呼び名となった（松村・川本54)。ヴィクトリア朝では女性は従順で、良き妻、母であることを望まれ、性的純潔が重んじられていた。女性は優しく清らかな、まさに天使のような存在であることが求められていたのである。「家庭の天使」とは、そのような女性の理想像を表すには恰好の名称だった。テスの外見、テスに与えられた「白」のイメージはそうした「天使」を思い起こさせるのである。実際、テスの夫となるエンジェル・クレアにとって、テスはまさに汚れのない「天使」であった。エンジェルは、テスを「すがすがしい清純な『自然』の娘(a genuine daughter of Nature,120)」と思い、そして彼女をアルテミス(Artemis)やデメテル(Demeter)といった女神の名で呼ぶ(130)。テスはエンジェルによって「白」のイメージを与えられ、そのイメージに固定されてしまうのである。女性に与えられるこの「白」のイメージが、テスの悲劇を呼ぶ側面の一つなのである。

テスの白い姿がテスの悲劇を象徴するような場面がある。ひとつはアレクにレイプ[3]される場面での白いモスリン姿のテスである(73)。テスの白いモスリン姿はテスの純潔、清らかさを表し、その白く清らかなテスが醜く染められてしまうことを象徴的に表している。

Why it was that upon this beautiful feminine tissue, sensitive as gossamer, and practically blank

as snow as yet, there should have been traced such a coarse pattern as it was doomed to receive... (74)

（訳）

どうして、薄い紗のようにもろく、事実まだ雪のように純白な、この美しい女性という織物に、それが受け取る運命として、そのような粗悪な模様が描かれてしまったのだろう。

ナレーターはテスの悲劇をこのように嘆く。「白」のイメージを強調されたテスは、その白さが醜く染められたと描かれ、そこに男性によって暴力的に描かれた悲劇的な運命に甘んじる存在としてとらえられている。

2．赤としてのテス

「白」のイメージを与えられ、「天使」を彷彿とさせる外見を持つテスであるが、テスはヴィクトリア朝における「家庭の天使」のイメージを覆すような「赤」のイメージも与えられている。テスを単なる「家庭の天使」にとどめておかないのが、この「赤」の性質なのである。天使たちが持ち得なかった「色」を持ったところにテスの新しさがある。

メイデイのダンスでの白い衣装の娘たちの中で、テスだけが髪に真っ赤なリボンを着けている。「このような目立った飾りを誇ることのできる者は彼女だけ」であり、テスの容姿の美しさと華やかさが示されている。赤いリボンに表される赤は、テスの容姿の美しさを表し、テスの肉体的な魅力が表現されている。テスの美しさはたびたび赤によって表され、ことに真っ赤な唇や口は繰り返し描写されている。マーロット地方独特の“ur”の発音をするためにテスが尖らせる真紅の唇(15)、アレクが摘んだいちごを受け取るテスの唇(42)、トラントリッジで鶏の世話をするテスが懸命に口笛を吹こうとする唇(61)、トールボセイズの農場で、昼寝から目覚めたテスがあくびをしながら見せる蛇の口のように真っ赤な口(169)などである。また、アレクにとってテスの唇は、並々ならぬ魅力の源である。アレクは度々テスの唇を絶賛し、「そのヒイラギの実のような唇にキスさせてほしい」と言う(55)。「イヴの口以来これほど男を狂わせる口はなかった」(323)というアレクの言葉によって、テスの唇がいかに魅惑的であるかが強調されている。テスの肉体的魅力が赤で表されることで、テスには「赤」のイメージが与えられている。テスの赤の性質とは、テスが醸し出すセクシャリティなのである。「家庭の天使」が性や肉体を持たない存在であるのに対し、テスは性と肉体を持った存在である。テスのこの「赤」の性質は、テスの悲劇と大きく関わってくる。

しかしテスが持つ「赤」の性質は、男性に身勝手な解釈を許すばかりのものではない。そこには彼女自身の激しい情熱も隠されている。おとなしい豹として表されるように(187)、テスは内に激しいものを秘めている。テスのエンジェルに向ける愛は、「召使いでもいいから側にいたい」(337)というほど激しいものであり、それと同じ激しさでテスはアレクを嫌悪し、時には彼の顔を手袋で打ち、最後にはアレクを殺すに至る。テスは自我を持った女性であり、母親とは違って結婚だけを待ち望む女ではなかった。テスには教師になって自活するという夢があった(48)。テスには強い自立心と自尊心があり、裕福な親類との結婚を進めようとする母親に対してテスは「いっそ仕事がしたい」と言う（36)。テスは男の従属物になることは望まず、アレクの人形にはなりたくないと言って、彼の元を去る。母親はテスが彼女を身ごもらせたアレクに結婚を迫らなかったことを責めるが、テスにとっては愛してもいない男との結婚など考えられ

なかった(82)。自我に目覚め、自分で選択する19世紀末の新しいヒロイン像がテスにも見うけられる(内田314)。

テスのこうした「赤」の性質は彼女の新しさともなっている。テスを「赤」のイメージでとらえ、テスのセクシャルな魅力と自我の強さに惹かれているのがアレクである。言い換えればアレクがテスに赤の意味付けをしているとも言える。アレクによって引き出されるところも多いテスの「赤」の性質が、テスが辿る悲劇のもうひとつの要因なのである。

3.「誘惑者」としてのテス

テスを「白い少女」から「赤い女性」へと変化させるのはアレクである。作品の中で際立って鮮やかな印象を残す場面がある。それは次のような場面である。一家の生活の糧である馬を死なせたことに責任を感じ、テスは気乗りしないままにダーバヴィル家を訪れ、その家の息子アレクに会う。彼が強く勧めるので、テスは彼と芝生や花壇を見て回る。

> When she could consume no more of the strawberries she filled her little basket with them ; and then the two passed round to the rose-trees, whence he gathered blossoms and gave her to put in her bosom. She obeyed, still like one in dream, and when she could affix no more he himself tucked a bud or two into her hat, and heaped her basket with others in the prodigality of his bounty. (42)
>
> (訳)
>
> テスがもうそれ以上いちごを食べられなくなると、彼は彼女の小さなバスケットにいちごをぎっしりと入れ、それから２人はバラの木の周りを通り、彼はそこから花を集めるとテスの胸のところに飾った。テスはまだ夢の中にいるように従った。テスにそれ以上花を飾れなくなると、アレクは彼女の帽子に１,２本飾り、別のバスケットに溢れんばかりに花を入れた。

この場面では、テスは赤に溢れている。赤いいちごの実、それを受け取り、食べるテスの真っ赤な唇、テスの胸元や帽子を飾るたくさんのバラ、そしてバスケットに溢れんばかりのいちごとバラ、それらが一体となってテスを彩る。ここでは真っ赤に彩られることによって、テスが持つ「赤」の性質が表されている。テスが持つ「赤」の性質とは、アレクが自分を誘惑する源と感じてやまない赤い唇に代表される、テスが醸し出すセクシャリティである。テスが無意識に醸し出すセクシャリティを過剰に解釈し、アレクはテスを肉欲の対象とする。テスを赤いバラで彩るアレクは、テスに「赤」の意味付けをしている。テスの悲劇の始まりとなる場所は果樹園である。この果樹園でテスはまさに食べてはいけない実を食べたのである。その実は真っ赤ないちごであり、ここでもテスの運命における赤が強調されている。果樹園におけるテスは、さながら楽園のイヴであり、アレクはイヴを誘惑する蛇である。そして、禁断の実（ここではいちご）を与えている。この実を食べたことがテスの悲劇の始まりとなる。その意味で、この場面は非常にシンボリックであると言えるだろう。

テスを彩るのは赤いバラであるが、バラはシェイクスピアをはじめ、英文学には頻繁に登場する。バラは性愛の象徴とされ、多くの作品で恋愛を彩る役割をしている（ミルワード451-460)。「バラのしとね」のように、性的快楽に満ちた生活を象徴的に表す表現もある（ミルワード456)。

そのような性的ニュアンスの強いバラがテスに「性」という赤い色を与えている。井上澄子は、アレクがテスをバラで飾り立てるのは、性的快楽の対象である「転落の女」(4)を比喩的に表したものであると指摘する（内田317-318）。そしてそのバラの刺はテスを刺し、テスに彼女の悲劇の始まりを告げるのである。

テス自身は自分のセクシャルな魅力を意識せず、自分の容姿が男性を誘惑し得るものであるとは遅くまで気付かない。エンジェルに捨てられ、自力で生きていくことになったときにはじめて、テスは自分の容姿が持つ危険を意識し、身を守るためにハンカチで顔を包んだり、眉毛を切ったりしている(280)。テスには自分から男性を誘惑しようなどという考えはないが、テスの意志とは関係なく、彼女の容姿の美しさは男性のセクシャリティを掻き立てる。言うなれば、テスは存在するだけで誘惑者となってしまうのである。これはアレクの使うレトリックであり、彼はテスを誘惑者と言ってやまない。フリントコム・アッシュ(Flintcomb-Ash)で再会したアレクは改心を遂げたかに見えたが、テスと会うために自分が行うはずだった宗教的な説教を放棄し、次のように告げる。

> '... Nothing intentionally. But you have been the mean – the innocent means – of my backsliding, as they call it... why then have you tempted me? I was firm as a man could be till I saw those eyes and that mouth again...' (323)
>
> （訳）
>
> 「意図していたことはなにもないよ。でも君はその仲介役―僕のいわゆる旧悪への逆戻りの、無邪気な仲介役なんだ…どうしてこの上まだ僕を誘惑するんだい？再びその目と口元を見るまでは、僕はこれ以上はないくらいしっかりしていたんだ」

テスが魅惑的な目と口元を持っているということで、テスは誘惑者にされている。テスはアレクの欲望を反映した「赤」のイメージを持った女としてとらえられている。

4．白と赤の狭間で

テスは「清純な娘」としての「白」の性質を持つと同時に、相手のセクシャリティを掻き立てる性を持ち、自我をそなえた「赤」の性質を持っている。しかし、テスはこれら二つの性質のどちらか一方としてとらえられるべき存在ではない。にもかかわらず、テスは自分を白い存在として見るエンジェルに対してはどこまでも白く、赤い意味付けをしているアレクに対しては赤の性質を示しているかのように映る。

「家庭の天使」が持ち得なかった自我と激しさを持ったテスであるが、彼女がその自我と激しさを向けるのはアレクばかりである。嫌い抜いているアレクに対してテスはあくまでも冷淡であり、彼を拒み続ける。しかし、テスはエンジェルに対しては、「家庭の天使」のように行動する。テスはエンジェルに非常に従順で、彼の言葉はテスにとって絶対なのである。フリントコム・アッシュでアレクと再会したテスは、アレクの改心を信じない。なぜ信じないのかと尋ねるアレクに、テスは「あなたよりも良い人(エンジェル)が、そんなことは信じないから」と答える(142)。テスの考えの多くはエンジェルの考えに従ったもので、テスはエンジェルの思想を一字一句残らず覚えている。そして、テスはエンジェルの言葉でアレクに語り、エンジェルの思想をアレクに誇らしく伝える。テスは「最も完全な男性でもそれに値しないほどの信頼の

念」をエンジェルに賭けているのである(321)。自らの過去を告白し、エンジェルが自分の過ちを棚に上げてテスを許そうとしない時でさえ、テスは腹も立てず必死にエンジェルの許しを請う。そして「召使いでもいいから一緒に暮らしたい」とまで言う(337)。テスは全身全霊を込めてエンジェルを愛する。ブラジルへ行こうとしているエンジェルは、イズ・ヒュエット(Izz Huett)と会い、彼女に一緒にブラジルへ行かないかと誘う。自分をテス以上に愛しているかと尋ねるエンジェルに、イズは「だれだって、テス以上に、あなたを愛することなんかできませんもの！…あの人は、あなたのためなら命でも捨てたでしょう。あたしなんか、とてもかないませんわ」と答える(270)。テスがエンジェルに向ける「赤」の性質は、その激しい愛情だけなのである。

テスはどちらかといえば、本来的には「白」の性質の持ち主である。家庭における彼女は、両親を思いやり、弟妹の面倒をよく見る優しい娘である。自分勝手なところがなく、献身的で、馬のプリンス(Prince)が死んだ時も、自分の責任を強く感じ、気が進まなくても家族を思ってダーバヴィル家に赴く。テスは初々しく、性的にも控えめである。テスは男に言い寄られてその手に落ちた娘たちの「甘い悶え、苦い甘さ、楽しい苦しさ、心地よいせつなさ(“the soft torments, the bitter sweets, the pleasing pains, and the agreeable distresses”)」を目にしても、自分ならそういう場合どうするかなど、ほとんど考えてもみなかったのである(19)。テスは本質的には、「無垢で清純な」娘の要素を多分に持っている。

しかし、テスは本質的、あるいはその性質には多分に、幼さを残す「白」の要素を持っているが、肉体的には大人びた「赤」の要素も強くあった。それがアレクの目を釘付けにする。

> Tess Durbeyfield did not divine, as she innocently looked down at the roses in her bosom, that there behind the blue narcotic haze sat the ‘tragic mischief’ of her drama—he who was to be the blood-red ray in the spectrum of her young life. She had an attribute which amounted to a disadvantage just now; and it was this that caused Alec D’Urberville’s eyes to rivet themselves upon her. It was a luxuriance of aspect, a fullness of growth, which made her appear more of a woman than she really was. She had inherited the feature from her mother without the quality it denoted. (42)
>
> (訳)
>
> テス・ダービフィールドが無心に胸元のばらを見下ろしたとき、その青い麻酔剤のようなもやの向こうに、彼女が演じる劇の、悲劇的な運命のいたずらが潜んでいることには気付かなかった。彼は彼女の若い人生のスペクトラムの中で、血のように真っ赤な光線となりそうな男だった。彼女が持っているある特質、それがちょうど今不利益になったのだ。そして、その特質はアレク・ダーバヴィルの目を彼女に釘付けにした。豊満な容姿と十分な発育は、彼女を実際よりも女らしく見せた。彼女はその外観を母親から受け継いでいたが、その外観が示すような性質は受け継いでいなかった。

テスの性質と肉体の間には大きなギャップがある。豊満な肉体と美しい顔立ちであるがゆえに、テス自身は自らのセクシャリティを自覚していないにも関わらず、アレクに彼女のセクシャリティの存在を読み込まれている。もし、テスが母親のように自らの性的、肉体的魅力を利用するような性質であったなら、テスは「赤」の存在に徹することもできたであろう。しかしテス

がその性質に「白」の要素を持っていることで、テスは二つのイメージの間で引き裂かれてしまう。テスの肉体に魅了されるアレクにとってのテスは、「誘惑者」であり、テスの精神的な純粋さに惹かれているエンジェルにとっては「すがすがしい乳絞りの娘」なのである。テスが二つのイメージの間で引き裂かれてしまうのは、彼女の精神と肉体が持つイメージの不一致によるものではなく、テスの性質に二人の男がそれぞれの欲望を重ねて意味付けしてしまうからであろう。テスはテス自身である以前に、二人の男の欲望を反映した存在、「誘惑する女」であり、「清純な娘」にされているのである。

処女を失ったテスは、傷つき、社会からも冷たくあしらわれ、私生児を生み、亡くすという苦しみまでも経験する。そして、このアレクとの過去こそが、最愛のエンジェルをテスのもとから去らせてしまうのである。テスがアレクのレイプの犠牲者となったのは、テスが持つ「赤」のイメージによるところが大きい。しかしそれと同時に白のイメージの犠牲ともなっているのである。テスが持つ精神的な白の性質と、顔つきに残る幼さやあどけなさは、テスに清純無垢な娘を感じさせる。テスをそうしたイメージで捉え、そのイメージに固定してしまうのは、他でもないエンジェルであった。エンジェルは自分で作り上げた無垢な娘のイメージをテスに押し付けている。エンジェルはテス自身ではなく、テスの姿を借りた何か別のものを、テスの向こうに見ているのである。テスの過去を知ったエンジェルは、テスは「別の人間になってしまった」(228)と言う。悲痛な叫び声をあげるテスに、エンジェルはさらに言う。

> 'I thought, Angel, that you loved me—me, my very self !…Then how can you, O my own husband, stop loving me?'
> 'I repeat, the woman I have loving is not you.'
> 'But who?'
> 'Another woman in your shape.' (228-229)
> (訳)
> 「エンジェル、私はあなたが私を、私自身を愛してくれていると思っていたのに。…どうしたらあなたは、ああ、私自身の夫であるあなたは、私を愛さなくなるなんてことができるの？」
> 「繰り返すが、僕が愛していたのは君じゃないんだ」
> 「それなら、誰なの？」
> 「君の姿をした別の女だ」

エンジェルは、テスの中に理想の女性の幻想を見ていたに過ぎない。彼の幻想はヴィクトリア朝の男性が女性に抱いていた幻想と同じものであった。ヴィクトリア朝の女性が、従順で性的に清らかであることを理想とされ、その理想像を「家庭の天使」の名のもとに押し付けられていたことは先に述べたが、エンジェルもまさにそのような理想をテスに押し付けていたのである。

エンジェルが、テスの過去を知ったことによって、テスが全く違う人間となってしまうほど衝撃を受け、テスの処女性がこんなにも問題となってしまう背景には、ヴィクトリア朝の性に対する道徳基準がある。ヴィクトリア朝では、中上流階級を中心に女性が処女であることを結婚の絶対条件とするような処女信仰があった。ひとつには家父長制という背景がある。私有財

産制度に基づく家父長制社会において、その財産を受け継ぐ後継ぎが正当な子供であることは必須だった(川本15)。妻である女性が夫以外の男性と通じた結果、その子供が家の後継ぎになるようなことがあっては家長としては許しがたいことである。また、他の男性が妻である女性と通じることは、「妻」という「家の財産」を侵略する行為であった。こうした事情から、女性には貞操が厳しく求められた。性に対する抑圧が強まり、家長である、あるいは将来家長になる男性たちが女性の処女性を重視するようになった。さらに、工業化という背景がある。工業化により職場と家庭が分離されたのに伴って、職場は公的な場として男性が占有し、プライベートな場である家庭が女性の領域と考えられるようになる。家庭は外の悪徳や競争から遮断された安息の地として神聖化され、その家庭という神殿を司る天使として祭り上げられたのが女性たちである(坂井20)。これが、「家庭の天使」という理想を生み出す。清らかな天使たちは、心身ともに清らかであることが求められていた(坂井87)。「家庭の天使」は「完全な婦人」でなければならない(松村66)。そして処女でなければもはや「完全」ではないのである。

エンジェルはテスの過去を思い悩む。

> Nothing so pure, so sweet, so virginal as Tess had seemed possible all the long while that he had adored her, up to an hour ago ; but
> The little less, and what worlds away! (235)
> (訳)
> 彼が彼女を愛慕していた長いあいだ、ほんの一時間前までは、テスほど純粋でかわいらしく、清らかなものはあり得ないように思われていた。それなのに、
> 　　わずかに欠けただけで、なんと変わってしまったことか！

エンジェルは明らかにテスの中に「家庭の天使」を望んでいた。処女でないと分かった途端、テスは「完全」ではなくなり、エンジェルにとっては全くの別人となってしまうのである。ヴィクトリア朝の女性観は、性と女性を完全に切り離し、女性は性を持たず、性的快楽など求めないという考えを押し付けていた。そのような価値観を持ったエンジェルにとって、それまで性を持たないと思っていた娘が突然、性を持った生身の人間となってしまったのだから、「全く別の人間」になってしまうほどの衝撃を受けるのも無理はないのかもしれない。処女であるか非処女であるかは、一人の女を全く別の女にしてしまう。そして、非処女であるということは、女としての要素に「欠けた」ものがあるということなのである。

当時の女性観は、汚れを知らない無垢な女性、つまり「家庭の天使」か汚れた女の二種類しかなかった。結婚前に処女を失った女性のように「家庭の天使」からはみ出した女性は「転落の女」として蔑まれたのである（坂井89, 92)。この時代、女性の処女性はそれほど重要な問題であり、女性が性的に清らかでないということはもはや罪悪の領域であった。それにも関わらず、男性の貞淑は重んじられてはいなかった。そして夫と妻の不貞は全く異なった扱いを受けたのである（土屋53)。当時、夫は妻の姦通を訴え、離婚することもできたが、妻は夫の浮気を訴えることも、離婚することもできずじっと耐えなければならなかった。性のダブル・スタンダードがあり、しかもこれは婚姻訴訟法そのものに歴然と認定されていたのである（松村77)。エンジェルが自分にも過去の過ちがありながらテスを許せないのも、こうした価値観の持ち主であるからだろう。

ヴィクトリア朝の女性たちは「家庭の天使」というイメージのお仕着せによって、自己も自由も奪われていた。男性に尽くし、従うことを要求され、「自分」というものをどこにも持てなかったのである。さらに、生身の人間として当然持っているはずの性や性欲を否定され、ただ男性にとって都合のよい「人形」でいることを強いられたのである。そして、その価値観に収まりきれない女性たちは厳しく断罪された。ヴィクトリア朝で女性をこのような悲惨な状況に置いていた価値観を、エンジェルもまた持っていた。彼もテスをこうした価値観でとらえ、責め、拒絶する。テスはヴィクトリア朝における女性観の犠牲者であり、純粋無垢な「白」のイメージを持っていたことによって、そのイメージに固定され、身勝手な価値観によって後には「転落の女」として扱われ不当な裁きを受ける。

結　論

テスは「赤」のイメージによって精神的にも肉体的にも傷つけられたが、それに追い討ちをかけ、彼女を「転落の女」としてしまうのは「白」のイメージであった。テスの「赤」のイメージはテスの悲劇の直接的な要因ではあるが、テスを悲劇へと導いてゆくより大きな要因は、「白」のイメージを絶対視する価値観である。そしてこれら二つのイメージは、アレクとエンジェルという二人の男性の身勝手な欲望の反映である。アレクは肉欲によってテスを犯し、エンジェルは自分の理想を押し付けテスを捨てた。テスは、アレクとエンジェルによって作り上げられたイメージによって翻弄され、悲劇の道を歩んでいくのである。テスに与えられた「赤」のイメージは女性の肉体的・性的な魅力を表し、アレクの肉欲はテスをそうしたイメージでとらえ、テスは彼のレイプの犠牲となる。一方で「白」のイメージは、エンジェルが持つヴィクトリア朝の性道徳に基づいて、テスを清純な「家庭の天使」にした。そのイメージに基づく幻想によってテスはエンジェルに捨てられ、再びアレクの肉欲の犠牲となり、さらなる悲劇を辿っていく。赤と白に表されるイメージは、男の身勝手な欲望を反映した女性のイメージである。こうした女性に対するイメージの押し付けが、テスを悲劇へと導くのである。

しかし、テスはただ黙って悲痛な運命に身を任せていたわけではない。アレクにレイプされた後、テスは嫌悪するアレクの世話には甘んじず彼の元を去る。レイプ、赤ん坊の死という苦しみを経て、新たな生活に踏み出そうともする。フリントコム・アッシュで再会したアレクの身勝手な言い分に対して、テスは真っ向から怒りをぶつける(331)。また、執拗にテスにいやがらせをする雇い主グロービー（Groby）に対しても昂然と立ち向かう（291-292)。エンジェルの不当な仕打ちに対しても、テスは最終的には強い非難の言葉を浴びせる(368)。彼女は不当な仕打ちに対して抗議すべきところでは抗議をし、苦境の中でも自ら生活を切り開こうとする逞しさも持ち合わせている。そのような意味でも、テスは「家庭の天使」に納まってはいない。自己を持っているという点においても、テスは「赤」の性質を持っているのである。

『テス』に現れる赤と白は、テスという娘にある「女」のイメージを与えた。赤に表される一つのイメージは、男を誘惑するような女性の性的、肉体的魅力である。そして一方ではまた、赤は女性の生命力や、逞しさを表してもいる。白には、ヴィクトリア朝の「家庭の天使」に表されるような純粋無垢で清らかな女性のイメージが色濃く反映されている。赤と白という色によって、テスにはある「女」のイメージというものが投影されている。テスを通して、彼女をとりまく男たちの女性観が浮かび上がってくる。それは、女を性的快楽の対象と見なす価値観であったり、女に精神的な安らぎと肉体的清らかさを求める価値観であったりする。テスはこ

うした女性観の犠牲になったといえる。「赤」ととらえる価値観によってテスは性的な侵害を受け、「白」ととらえる価値観によって、精神的な傷を深め、夫に捨てられる。『テス』に描かれる赤と白が表す女性観は、「女」という性が抱える問題を提起しているのである。

註

(1) ヴィクトリア朝小説におけるヒロインの肉体不在、ハーディがその肉体をヒロインに取り戻させようとしたことについては、川本静子『<新しい女たち>の世紀末』p.15-16、p.238を参照した。

(2) 訳はすべて、井上宗次、石田英二訳を参考に筆者が訳したものである。

(3) アレクによるテスの処女喪失を、一方的な“rape”と見るか、それとも、誘惑されてある程度テスの合意を含んだ上での処女喪失“seduction”と見るかは議論の分かれるところである。テスはアレクによって処女を失った後、しばらくアレクとの関係に身を任せている。それは次のような描写から明らかである。「彼女は彼を恐れ、彼の前でひるみ、自分の無力を彼に巧みに利用されて、屈服したのだった。それから一時、彼の熱烈な態度に眩惑され、しばらくはわけわからずに身をまかせていたが、とつぜん、軽侮の念がわき、いやになって、逃げ出したのだった」(井上・石田138)。このような状況から、テスの処女喪失は“seduction”と考えられなくもない。しかし、処女を失った晩、テスは眠っていて意識はなかった。加えて、テスはたびたび彼女の肉体を求めてくるアレクを拒否しているし、テスにとってアレクは愛していない、もしくは愛せない存在であることは明白である。筆者は、アレクとの性交渉はテスが全く望んでいないものであったと考える。したがって、テスの処女喪失はアレクの一方的な“rape”であると解釈する。

(4) 「家庭の天使」の対極にある女性像が「転落の女」である。「転落の女」とは、家父長制の規範が求める女性像から逸脱した女であり、家庭という聖域を守れない女、自らの性的欲求に負けた女である。結婚外の性交渉を持つ、愛人や娼婦がそれにあたる。「転落の女」はすなわち娼婦とも解釈でき、彼女たちは社会規範の外に位置付けられていた。「転落の女」については、江藤秀一・松本三枝子編『イギリス文化・文学への誘い』(205)、「転落の女」、すなわち娼婦という解釈については、松村昌家『ヴィクトリア朝の小説と絵画』(85) を参照した。

テキスト

Hardy, Thomas. *Tess of the D'Urbervilles* (1891). London: Penguin, 1998.
トマス・ハーディー『テス』井上宗次・石田英二訳, 東京：岩波, 1960.

引用文献

江藤秀一, 松本三枝子編『イギリス文化・文学への誘い』東京：開拓社, 2000.
川本静子『<新しい女たち>の世紀末』東京：みすず書房, 1999.
河村貞枝『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』東京：明石書店, 2001.
松村昌家『ヴィクトリア朝の小説と絵画』京都：世界思想社, 1993.
——, 川本静子, 長島伸一, 村岡健次編『女王陛下の時代』東京：研究社, 1996.
Milward, Peter, *An Encyclopedia of Fauna and Flora* (1990).
ピーター・ミルワード『英文学のための動植物事典』中山理訳, 東京：大修館書店, 1990.
中村志郎『ハーディ文学の諸相』東京：英潮社, 1994.
坂井妙子『ウエディングドレスはなぜ白いのか』東京：勁草書房, 1997.
十九世紀英文学研究会編『「テス」についての13章』東京：英宝社, 1995.

土屋倭子『「女」という制度』東京：南雲堂, 2000.
内田能嗣編『ヴィクトリア朝の小説』東京：英宝社, 1999.

A Woman in White Clothes and Red Roses: Two Images of Tess

‹Abstract›

99E056 Kyoko Mitomi

Tess of the D'Urbervilles (1891) is one of Thomas Hardy's most popular and tragic novels. When Hardy wrote this novel, the feminist movement had already developed in Britain. The movement focused on the problems of gentle women, who were restricted by their image as a "perfect lady." At that time many gentle women couldn't marry or get jobs, and they suffered from poverty. This situation was reflected by a group of novels, which includes *Tess of the D'Urbervilles*. This novel contains Hardy's criticism of the moral standard concerning sexual activity and marriage in the Victorian era.

Tess, the heroine of the novel, is often described by use of color. Red and white images are used to point out the problems of women. This thesis explores how the images of red and white describe Tess and show the problems of women.

We can see the image of white when Tess wears a white frock at the May Day Dance. Tess has a childlike appearance, and she doesn't fit in with the atmosphere of a public house such as the Rolliver Inn. Tess is different from people who like the smell of alcohol and enjoy the pleasures of sex. Moreover, the image of Tess who baptizes her baby reminds us of the Virgin Mary. These images also overlap with that of the "Angel in the Home," an idealized image of women in the Victorian era. In fact, Tess could be an angel in the home for Angel Clare, her husband. These white images will cause a tragic sequence in Tess' life.

On the other hand, Tess is portrayed with red images, which subverts her white images. The red figure of Tess, especially with her crimson lips, is described repeatedly to emphasize this. The scene where Alec gives Tess roses and strawberries makes a strong impression on readers. The red images lead her to a tragic affair with Alec.

The red and white images reflect the selfish desire of the males, Alec and Angel. Emphasizing the red images, Alec is encouraged to treat Tess as a woman full of physical beauty and sexuality, in order to fulfill his sexual desire for Tess. On the other hand, Angel identifies Tess with images of a pure girl and an idealized virgin. However, when he learns that Tess was raped by Alec and had a baby, the angelic image he created of Tess is destroyed and he leaves her. Hence, Tess' life must be tragic because she is interpreted by the two different images of her created by Alec and Angel.

These red and white images seem to reflect the typical images of women. Red expresses the attractiveness of the female body and sexuality, and white expresses the idealized woman who is the obedient and chaste good wife and mother. Tess becomes the virgin of rape because of the red image. Then she is judged unfairly and is forced to suffer. The problems of women can be clearly seen by

studying these two images in relation to Tess.

（卒業論文指導教員　杉村使乃）